
自由を望む者

瑞雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自由を望む者

【Nコード】

N9074P

【作者名】

瑞雨

【あらすじ】

『妾には自由がない。金も玉も地位も知性もすべてを手にしているのに、自由だけは唯一手に入れることができない』 私には何もない。金も玉も地位も知性もない。けれど自由だけは唯一持っている』 『わたくしには願いが無い。金も玉も地位も知性も生きていくには十分ある。そう、自由でさえも』 自由を望む姫と金と地位を望む町娘、そしてその両方を持つ女中。そんな3人の物語。

ブローグ

ああ、うれしやうれし、望みは叶えられようぞ

うれしやうれし、望みはいつか我のもの

手にするものはなんぞや

金か、玉か、財宝か

手にしたものはなにごとや

銀か、珊瑚か、ギヤマンか

いいえ、違う、全て違う

我が手にし宝物

それは自由ぞ、自由の身

何者も手にするその宝

我が持たぬ宝物

ああ、うれしやうれし、自由の身

いつか失う儚き宝

ほんの一時の夢なれど

叶えしものは壮大じゃ

ゆめゆめ夢見ることなかれ

夢はいつか消えようぞ

明日はゆめみし、あなうれし

プロローグ（後書き）

念のためR15設定。

自由を望む者

花は人や獣と違い動くことができない。

生まれた瞬間からそこで生き、そこで死ぬ運命。

人や獣は自由に動き回り、好きな時に好きな場所で子を産み、死んでゆく。

だが、木や花は動けない。だから風や虫を頼って子孫を残すのだ。

まるで自由などない。

花は哀れだ。

否、本当にそうであろうか。

本当にこの動けぬ生命を哀れだと思っか。

答えは否。

何故ならば、このものたちは動けぬのではないからだ。
脚がないから動けないのではない。

ただ、動く必要がないから動かぬのだ。

歩き回るための脚がなくても生きてゆけるのだ。

歩く必要などまるでないのだ。

動き回れるものと、動く必要がないもの。

本当に哀れなのはどちらか。

「妾はまるでこのものたちのようじゃ」

自由に動けぬこの体。

足が悪いのではない。体が悪いのでもない。

家がそうさせるのだ。身分がそうさせるのだ。

自由に歩き回ることさえ制限される。

己の脚で外を歩いたことなどない。

「だけどそなたは自由だ。動けぬのに自由を手にしてゐる」

動けぬのではない。動かぬのだ。花は自由だ。何にも囚われていない。

羨ましい。

いつその手で握りつぶしたくなるほど、恨めしい。

「妾は一体何であろう。動けるのに動けない」

話すことも笑うことも自由にできない。
見るものも食べるものも、着るものも、そして行くことさえ決められている。

一体誰が決めたのか。

「妾はそなたが羨ましい」

己の足で動き、好いた者の子を産む。獣は自由だ。何にも捕らわれていない。

羨ましい。

いつその手で捻り潰したいほど、
憎らしい。

「まるで、」

誰かが糸を引いている。

上へ下へと緩やかに。

勝手に動く手足。

何も持たない手、

地に着かない足、

仮面をつけた顔。

無表情、無思考、無意味、

無関係、無慈悲、無意志、

・・・無感情。

「妾は傀儡のようじゃ」

誰かが糸を引いている。

右手を、左手を、右脚を、左脚を、顔を、声を、

……心を。

大きな大きな力で、細い細い糸を、緩やかに急速に引く。

逆らうことのできない雁字搦^{がんじがら}めの細糸を、上へ下へと器用に操る。

「妾は何ぞや。そなたは何ぞや」

何時の間にかいた結婚相手。

見たこともない、誰かも分らない。

歳も顔も性格も、何も分らない。

知らない。

知っているのはその家と身分と位。

「ああ、これが妾の使命。これが妾の運命なのじゃ。」

生まれ変わるならば、妾はそなたになりとうよ・・・

何にもとられないそなたに

本当に哀れなのは花か、獣か、

人か。

自由を手にした者

「あの者をここへ」

「は…？」

「あの町娘じゃ」

「は、はい」

城下に見える一人の待ち娘を城へと連れてこさせた。

身分を持っていてさえ、城に入るには厳重な身分証明が必要となるに、それがただの娘となれば、ただ事ではないであろう。

だが姫が望んだのだ。ただのどこにでもいる、身分の持たない町娘を。

「姫様、連れて参りました」

「ご苦労。入りなさい」

「失礼致します」

侍女が低い姿勢で襖を開けた。その隣には啞然とした顔の女が一人。

「や、ううへ」

入室を促し娘へと体を向ける。侍女は娘を姫の元へとぐつと背を押し、自らは頭を下げてさがった。

「さあ、お座りなさい」

娘は慌てたように返事をする、遠慮がちに足を進めた。

その様子に姫はクスリと笑いを立てる。娘は恥ずかしそうに顔を俯かせた。

まさか生きるうちに城に足を踏み入れるなど夢にも思わなかった娘は、目の前に座る女性のあまりの気品の良さに気後れしながら、己も失礼がないように、上品に見えるように、慎ましく見えるようにそろりそろりと歩き、座った。

「そう緊張せずとも良い。楽になさい」

娘は裏返った声をあげ、更に姿勢を正した。姫は娘のその様子にまたクスリと笑みを浮かべた。

「そなたを呼んだのは聞きたいことがあったからです」

「わ、私にですか…？」

娘は驚きに目を開き姫を凝視した。同じように姫も娘を見た。

娘は姫を凝視した己の失態に慌てて視線をそらした。身分の高い者を目にするなど、それさえ罪になる。なのに卑しい身分の己が姫様を凝視するなど言語道断。娘は蒼白な顔で頭を下げた。

そんな娘の様子を姫は気にする風でもなく言葉を続けた。

「あなたは、自分をどう思いますか？」

姫の問の意図が分からず、娘は首を傾げた。

「ただの町民として生まれたことをどう思っておりますか」

娘は言葉を述べても良いものかどうかを決めかねている。

「正直に述べてください」

姫は娘から一時も目を離さない。娘は一瞬考えてから緊張で震える口をゆつくりと開けた。

「わ、私は…。ただの町民で生まれたことを何も考えたことはありませんでした。それを不満に思ったこともありません。だけど、」
「だけど？」

娘はちらりと姫を見て、それから顔を恥ずかしそうに赤らめた。

「ひ、姫様になりたいと思ったことはあります」
「姫に？」

姫の怪訝そうな顔に娘は顔面蒼白になりながら己の恐れ多い失言を慌てて詫びた。それを姫は制し続きを促した。

「姫様になれば、どんなに煌びやかな生活が待っているのだろう、と。わ、私だけではなく、町娘はみなあなた様に憧れています」
「私に…。そう」

「は、はい！姫様はたいそう美しくて、豪華なお召し物も、高価な宝石もたくさん持つてらして、女ならみな憧れます！！」

娘の勢いに姫はまた「そう」と返事をかえした。
娘は上品さのかけらもない己の所作に恥ずかしさがこみ上げた。

「着てみますか？」

「え？」

姫は打ち掛けをさらりと肩から落とした。

立ち上がった姫を見上げ、娘はわけが分からず呆然と姫を見つめる。

「交換して下さい。あなたの着物と私の着物とを」

そういうと姫はまた一枚着物を落とし、帯に手をかけた。娘は慌てて立ち上がり、オロオロと狼狽えた。

「ひ、姫様！わたしの着物はとても姫様がお召しになるようなものじゃありません！！そ、それにわたしが姫様の着物を着るなんて、そ、そんな恐れ多い……っ！！」

娘は声にならぬ悲鳴をあげた。

娘の慌てる姿を気にするでもなく姫は相変わらず着物を一枚、また一枚と脱ぎ捨て、とうとう最後の一枚となった。

「さあ、あなたも脱いで」

「で、でも……」

「私も着てみたいのです。町娘の衣装を」

そう言うてにこりと微笑む姫の美しさに娘は顔を赤らめ、消えるような声で返事をする。と己をつつむただ一枚の着物に手をかけた。

姫はその娘の手の上に己の白く綺麗な手を重ねて囁いた。

「さあ、お脱ぎになつて？」

妖艶な笑みを浮かべ着物を落とした。

部屋には煌びやかな着物を纏った娘と、質素な着物を身につけた女が一人。

「どうですか？姫の気分は」

「は、はい。とっても良い香りがします」

見当違いの答えに『町娘』はクスリと笑った。

『姫様』は己を包む着物をうっとりとして撫でる。

その姿のまま『町娘』は『姫様』に出自や家族、自らの役割や友人、

さまざまな事を聞いた。

『姫様』は楽しそうに、身振り手振りで己のことを話した。

大方話を終えたころ、『町娘』は己の姿を楽しむ『姫様』を一瞥し、立ち上がった。

「少し待っていて下さいね。茶を持ってきます」

「はい」

すっかりといい気分の『姫様』は『町娘』のおかしな言動に気づくわけでもなく、上機嫌で返事をして、豪華な着物を撫でつける。『町娘』は静かに部屋を出た。

「あら、お帰りにございますか？」

廊下を歩く侍女が『町娘』に声をかけた。『町娘』はにっこりと笑うと、立ち止まった。

「はい。姫様がお帰りになるようにと」

「そうでございますか」

侍女は人の良さそうな笑みを浮かべた。

「姫様のお気まぐれにお付き合い下さってかたじけのない御座います。お氣をつけてお帰りあそばし下さいませね」

「はい」

『町娘』はにこりと笑い、スタスタと足を進めた。

少し考えれば分かったはずだ。

姫が自ら茶を持ってくるなど有り得ないことだと。

少し考えれば分かったはずだ。

なぜ姫が一介の町娘の家族や友人の名を聞き、無駄なほどに町娘の詳細を事細かく聞いたのかを。

少し考えれば分かったはずだ。

『初めて』城を訪れた町娘が、案内もなく、また『迷いもせず』門へと向かったことが可笑しいことに。

少し考えれば分かったはずだ。

客人を帰すのに、姫様が侍従を呼ばず、ただ一人帰したことの異常さに。

少し考えれば分かったはずだ。

姫様がただの町娘を城へと上げたことがどんなに異様なことかを。

少し考えれば分かったはずだ。

城の中にいる姫様がどこにでもいるような平凡な町娘に興味を持つはずなどないということに。

誰一人異変に気がつかなかった。

そう、あの『町娘』さえも。

誰一人『姫様』と『町娘』が入れ替わったことに気がつかない。

『姫様』はあの部屋で楽しそうに笑っているのだ。

あれは気がつかなかった。

妾の浮かべる笑みが嘲笑だということに。

あれは気がつかなかった。

妾が、腹の底ではあれの上品に振る舞おうとする不格好な所作や耳にするも愚かしい言葉使いを、莫迦にしていたことに。

あれは気がつかなかった。

妾の演じるあれの『理想の姫様』に。

あれは気がつかなかった。

妾の思惑に。

おお、なんとも愚かな娘よ。

あまりの思慮のなさに嘆きさえ覚える。

おお、なんと愚かしき娘よ。

あまりに上手くいきすぎて反吐がでる。

さて、直に城はあれが偽物だと騒ぎ立てるだろう。

あの娘は処刑されるのであろうか。

『ただの町娘』が城に入り、姫様の着物を『奪い』、姫様を『名乗り』、姫様に『成り変わり』、姫様をどこかに『隠し』、富と地位と『世』を手にしうとした。あの娘は重罪を犯し、処刑される。

おお、なんとも哀れな娘よ。

ああ、だがしかしそれが妾になんの関係がある？

あの娘が死のうと生きろうと妾にはなんの関係もない。

『運命』だったのだ。

すべては仕組まれし運命、あるべき宿命、為すべき使命。

お前が悪いのだ。

自由を手にするお前が。

お前が悪いのだ。

しあわせそうに笑うお前が。

お前が悪いのだ。

身分を持たぬお前が。

お前が悪いのだ。

妾を――いや『姫様』の身分を望むお前が。

お前が悪いのだ。

妾と『同じ顔』をしたお前が。

お前が悪いのだ。

妾に見つかったお前が。

お前が悪いのだ。

愚かな頭を持つお前が。

妾はなにも悪くない。

悪いのはおまえだ。

何一つ望まなかった妾が自由を望んで何が悪い？

家のため、戦のため、世のため、自由を奪われた妾が、自由を手にして何が悪い？

妾はなにも悪くない。

なぜなら妾は姫だから。

だがしかし、

妾は今から、

「おまえじゃ」

妾はおまえでおまえは妾。
妾は今から、

「自由じゃ」

妾はしがない町娘。

「ふふ、ふ…、」

うふふふ、ふ、ふふふあははははははは…！！！！

「ワタシは自由だ…！！！」

そなたが望んだ城暮らし、とくと味わうがよい。

そなたが望んだ姫の位、そなたにやろうではないか。

豪華で艶やかな着物も美しい髪飾りもすべてをそなたにやろうぞ。

さあ、妾に見せておくれ？

くだらないこの寸劇を。

さあ、見事に姫を演じてみせておくれ？

そして妾を楽しませるのじゃ。

「ふふふ、」

お前は私。

ワタシハオマエ。

さあて、つまらぬ『芝居』の始まりはじまり、じゃ。

自由を手にした者（後書き）

自由をその手に。

自由を奪われた者

私はただの町娘。 富も名誉も持たない賤しい娘。

大きな城下は力のもつ美しき殿の支配する美しい町。 美しき殿の娘、美しき姫の住む大きな大きな城には幾人も兵と幾人も女中、幾つもの召し物と幾つもの髪飾り。 豊かな教養、豊かな知識、恵まれた環境。

ああ、羨ましい。

同じ人でありながら片やただの町娘、片や羨望の姫。

城で産まれたならば、その血がほんの少しでも流れているならば、美しかろうと、醜女であろうと、『姫』としての生がある。 同じ人で同じ女で同じ歳。 何一つ変わらない。 ただ産まれる場所が違っただけ。 もしも私があそこに産まれたならば何か変わっていただろうか。 今ここにいる『わたし』として産まれていた？ それとも『姫様』として産まれていた？

町娘が嫌なわけではない。 ただ、女ならば、一生涯に一度はそれを望むもの。

そうでしょうか？

女として生きたなら誰でもみな姫になりたいと思うはず。 低い身分に生まれれば生まれるほど叶わぬ願いを夢見る。 決して叶わないと

分かっているからこそ、より理想の姫に想いを馳せ現実を生きる。
女は産まれた時から『姫』に恋い焦がれ、幾つになっても見もしぬ
殿に想いを募らせる。

馬鹿げた夢だと思うでしょう？でもね、思うだけなもの。現実にな
るなんて思ってもいないわ。思うだけなら自由でしょ？姫様には決
してできないことを私たちがやってるのよ。『姫様になりたい』な
んて、姫様には決して思わないことだもの。私たちしかできないこ
とを姫様ができないことを私がやってもいいでしょう？

ああ、籠の中の鳥でもいい。

一度でいいから姫になりたい。

どうか叶えておくれ。

私の愚かな願いを。

「その娘」

「え…？」

「姫様がお前との謁見を望んでおられる。身なりを整えて付いて来
い」

私の元に姫の遣いだと言乗る男が来た。

どうして私が？

ああ、だけど、

私の願いは叶えられた。

目の前にいるのは私と同じ人種、性別、歳、背格好の姫。
いいえ、それだけでない。

『同じ顔』

髪や肌の色艶さえ違えどそこにあるものは私と同じもの。

同じ目と同じ鼻、同じ口。

双子・・・いいえ、分身と言ってもいいくらいそっくり。
ここまで似ているとおぞましさをすら感じる。

なぜ私が呼ばれたのかが分かった。

なぜただの町娘が謁見を許されない姫に呼ばれたのか。

美しき姫、可愛らしき姫。

なんと優雅で可憐なことか。だけどその目に映る野望を私は見抜いた。姫様がどんなに丁寧な口調で話そうと、どんなにたおやかに動こうと私には分かるの。これは本当の姫ではない、と。

あなたは何を望んでいるの？
あなたは何を企んでいるの？

ただ同じ顔をもつというだけでああなたが私を呼ぶ筈なんてない。

そうでしょう？

あなたは私に何をさせたいの？

私はなんの教養も持たない賤しい娘だけれど、ただ何も知らない愚図ではないの。なんの考えもなく城に足を踏み入れたわけではないの。

ねえ、姫様。あなたはなにがしたいの？

あなたは私に問う。

町娘で産まれたことをどう思うかと。

私は答える。

町娘が嫌だと思ったことはない。だけど姫になりたい、と。

あなたは手を出す。

私の着物を剥いだ白い手を。

私は手を出す。

あなたの艶麗な着物に。

あなたは探る。

私の人生のすべてを。

私は差し出す。

私の生きる道筋を。

あなたは消えた。

茶を持ってくると言っ たまま帰ってこない。

私は待つ。

帰ってこないあなたを。

ねえ、私分かったのよ？

何も気づいてないと思ってた？

馬鹿な娘をまんまと騙せた、って？

私、何も分からない愚図でいたかった。
だけど私気づいてしまったの。

あなたが私を呼んだことも、私があなたに憧れたと言ったことも、
あなたが着物を交換しようと言ったことも、私の環境を執拗な
までに聞き出そうとしたことも、『姫様』がわざわざ自らお茶を持
つてくると言っ たことも全てこのためだって気づいてたの。

気づいてて私はあなたの我が儘を飲み込んだ。

あなたは私に押しつけるのね。 姫としての息苦しい生活を私に強要するのね。

ええ、いいわ。

だったらあなたの望み、叶えてあげる。
その代わりあなたの全てをもらうわ。

私は姫よ。

美しき城に住む美しき姫。 これこそ私の望んだモノだもの。

どうして拒む必要があるの？

美しい着物に美しい髪飾り、豊かな教養に溢れんばかりの書物。これこそ私の欲したもの。 あなたが自由を求めるのなら差し上げる。私の自由と引き換えにあなたの人生を引き受けてあげるわ。

政略結婚？ そんなの氣にすることでもないわ。 誰と結婚しようと同じなもの。 私が求めるのは愛しい人ではなく『姫』だから。 あなたにあげる。 私に自由なんていらないわ。 あなたに譲ってあげるわ。私の人生を。 あなたの望み、叶えてあげる。

ええ、そうよ。 あなたはただの町娘。 私は美しき姫。

あなたは私が姫なんて務まらないと思っ
ているでしょうね。でもあ
なたにとって私が姫になれるかどうか、
身代わりになれるかどうかは関係ない
のでしょうか？あなたは自由になればそ
れでいいのだから。自由にさえること
ができれば私なんて、城なんて、関係
ないものね。私はあなたを逃がす間だ
け姫であれば良いんですもの。その後
私が姫でないとはれたとしても、私が
処刑されたとしても、あなたには関係
ないもの。もしもあなたが見つかった
城に戻ったとしても、あなたは私に罪
を擦り付けることができる。あなたに
とって悪いことは何一つないわ。

だけどね、あなたがどんなに賢くとも
やはりあなたは籠の中の鳥。

外のことなんてなんにも知らない、足
を、羽を奪われた鳥だったのよ。私は
城の中にさえいればいい。ただ口調さ
え気をつければあとはなんとでもなる
の。だけどあなたは生まれたときから『
外』に出たことがないのよ？あなたに
いくら知識があってもそれを生かすこ
とはできないわ。

だって、町娘に必要なのは、孔子でも
論語でもなく、『己の力』で生きる知恵
だもの。あなたは私が姫を演じることは
無理だと思っ
ているでしょうけど、姫様、あなたの方
が私を演じることが無理なのよ？

今まで何人もの人に支えられて生きて
きたあなたが、自分のことから満足に
一人で出来ないあなたが、ただの町娘
として生きることが出来るのかしら？
私はへまなんてしないわ。私は完璧に
あなたを『演じて』あげる。あなたが
いらな
いと言ったモノ、私が利用してあげる。

「妾は今日から美しき姫様、じゃ」

ねえ、姫様。

あとで返してなんて言われても返してあげないわ。

だって、そうでしょう？

なぜなら私は、

「姫だもの」

ふふ、本当の物語の始まりよ？

自由を奪われた者（後書き）

はたして奪われたのか、手放したのか。

自由を見逃した者

姫様がいない。

『あの日』から姫様が消えた。あの姫様と『同じ顔』をもつ娘が城に來たあの日、姫様は城からいなくなった。

いいえ、姫様はいるの。

私の目の前には確かに姫様が優雅に座っている。今までと何一つ変わらず姫様が鎮座している。だけど、だけれども、私たちが、私が遣えてきた姫様はいない。

あの日あの町娘が城を出ようと廊下を歩いていた時、私が声をかけたあの町娘は確かに町娘だった。いいえ、『町娘の格好をした姫様』だった。いくらあなた方が似ていようと、同じ顔をしていようとあなたは紛れもなく姫様。誰にも分からぬとも私には分かる。姫様の格好をした町娘、町娘の格好をした姫様。私の目の前にいる姫様は、姫様の格好をした町娘。

「あら、お帰りにございますか？」

どうして？

「はい。姫様がお帰りになるようにと。」

どうしてあなたは町娘の格好をなさっているのですか？

「そつでございますか」

あなたがそのおつもりならば、

「姫様のお気まぐれにお付き合ひ下さつてかたじけのう御座います。お氣をつけてお歸りあそばし下さいませね」

最早あなたはただの町娘。早く城から出ておゆきない。

「はい」

さよなら、私の姫様。

初めて出会つたあなた方がどうして入れ替わつたのか。姫様の独断なのか、共謀したことなのか。だけれども、これだけは言いますわ。あなた方が如何にして入れ替わつたのかなど私にとってはどうしても宜しいことなのですのよ？

あなたが姫であろうと町娘であろうと私にはどうでもいいことなのです。関係ありませんもの。私は『姫様』にさえ遣えたさえそれで良いのです。例えあなたが本物の姫であろうとなかろうと、『姫様』さえここにいるならばそれで良いのです。私の役目は『姫様』に遣えることなのですから。

「あら姫様、孔子に御座いますか」

「ああ、なかなか興味深い」

そうでございます。

ただの町娘だったあなたには城のすべてが珍しく興味深いものでしょうね。

「勉強熱心でよろしゅうございます。しかしあまり利口になられては殿方のお役目が御座いませぬのでほどになさいませね」

そう言つて、『賢き女中』の私はまるで冗談を言つかのように笑う。

産まれる前から定められた夫となるべき方。

そう、『姫様』の許嫁。あなたでもなく、いま城下にいるであろう『町娘』にでもなく、『姫様』の許嫁。

その方は今は『姫様』の隣に何の疑問も持たずに並んでいらつしやる。

なんにも知らずにただにこにことほほ笑んで、姫様を真綿にくるむように大切になさる。

なんてつまらない『ままごと』。

まるで道化。

そして『賢き女中』を演じる私も道化に違いない。

「姫様、お茶にございます」

やんわりと微笑んで、粗相のないように、優雅に、しずしずとお仕えする私は四方八方どこからどう見ても完璧な女中頭。そう、私が

お仕えするのは姫様ただお一人。目の前に座るのが誰であろうと私は自分の任務を全うさえできればそれで良いのです。

『この』姫様さえ『姫様』としての仕事を果たして下さるのならば私はあなたにお仕えいたしましょう。かつてここにお座りになられておいででしたあなたは安心して城下でお過ごしなさいませ。あなたがいなくともこの城には立派に『姫様』がいるのですから。私さえいればあなたがいなくともなんら困ったことは御座いませぬので。

あなたは私がこれまで『あなた』のために命をもってお仕えしていたとお思いでしょう。だけど勘違いなさいませんように。私がお仕えしていたのは『姫様であるあなた』なのです。決して『あなた』では御座いませぬわ。私はあくまでも『姫様』にお仕えしていたのです。

だから姫様でなくなつたあなたには、ただの町娘であるあなたには用は御座いませぬの。

あの日、あの時、私とすれ違った瞬間をもつて私のお仕えすべきはあなたではなくなつたのです。

私がいれば、『あの』姫様は立派に『姫様』として働いて下さいますわ。だからあなた様もどうか立派に町娘としてお生きなさいませ。

ですが姫様、これだけは覚えておいで下さいませ。

あなた様がお求めになられた『自由』、決して自由などではございませんことを。あなた様は城から出られず、産まれた時分から政略結婚、ただそのために様々な教養をお受けになられてきました。

辛いことも御座いましたでしょう。

己の意思で動くことも発言することも許されなかったあなた様にとつては、城下に住む人々はそれはもう自由だと思いいなられたことでしょう。

ただどあなた様がどんなにお賢くあろうと利発であろうと、所詮あなた様は世のことを何も分かっていらつしやらない。あちこち歩き回り、好きな時に話し、好きなものと夫婦となり、子を産み、その点においては『自由』と言えるのかもしれませんが。しかしその何倍も人々は苦勞を強いられ、あなた様のために税を納め、国を支えてきたので御座います。

食べる物を準備したり、寝具を用意したり、移動することも、ましてや着物を着ることすら私たち女中がいなければできないあなた様が、どうして城を出て生きてゆけるのでございましょう。いくら茶道、和歌、琴、その他多くの嗜みがあろうとも、『生きる』ための知恵がないあなたがどうして自由に生きられましょう。

ああ、哀れな姫様
自ら幸せを手放してしまった。

ああ、哀れな町娘
憧れは所詮憧れで。

ああ、哀れな姫様
お一人では生きることができない。

ああ、哀れな町娘

羽を折られた鳥のよう。

ああ、悲しきお人形

あなたに足など生えないの。

ああ、悲しきお人形

所詮あなたは偽物よ。

ああ、悲しきお人形

あなたは何処へ行こうと言うの。

ああ、悲しきお人形

せいぜい壊れるまで勤めておくれ。

自由を求め城を出たお姫様。

姫となった賤しい町娘。

すべてを知りながらも知らぬフリをする私。

ああ、ほんに罪なのはだれ？

一番の悪は誰？

最も哀れなのはダあれ？

自由を見逃した者（後書き）

道化を演じるのは私も同じ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9074p/>

自由を望む者

2011年5月12日16時29分発行